

## カメレオンやコノハチョウと化する子どもたち！

### <保護者面談に向けて②>

保護者面談を行うと、往々にして、次のような保護者と教師のやりとりが見られることがある。私自身も多く経験してきたことだ。

A(保)「家では、学校であったこと何でも話すんですよ。先生のこと友達のこと、クラスや部活のこと何でも。聞きもしないのにベラベラしゃべります。だから、学校のことは手に取るようにわかります。」

(教)「え、そうなんですか？正直、学校で自分から積極的にしゃべっている様子をあまり見たことないんですよ。休み時間もあまり友だちと賑やかに話している様子もないし。班活動の時も、おとなしい方で、自分から発言したり発表することはほとんどありません。」

もちろん、この逆もある。

B(保)「家で全然学校のこと話さないんですよ。もっとも、学校以外のこともそんなにベラベラしゃべる方ではありませんが。思春期なんだろうかねえ。だから学校での様子が全くわかりません。」

(教)「え、そうなんですか？学校ではよく友達と賑やかにおしゃべりしていますよ。グループの中心になって。私にも、お父さんやお母さんのこととか、おうちのことを何でもよく話してくれます。」

さて、AにもBにもあてはまらない、つまり、家でも学校でも変わらない様子の子であれば、「そうですか。」「そうですよね。」で終わって、スムーズに別の具体的な面談の内容に入っていけるはずではあるのだが……。

A、Bのようなことが、何故あるのだろうか？どちらが、子どもの本当の姿なのだろうか。結論から言えば、どちらの姿も本当の子どもの姿には違いないのだと思う。

一般的な感覚からすれば、子どもが、何でもかんでも話をする、饒舌にいろんな話を繰り広げる環境というのは、もちろん、その子にとって「居心地がいい」「ストレスがない」環境だからだと捉えるのが普通だろう。

だからAは家庭の方が、Bは学校の方が、「安心・安全」な場所、「ストレスを感じない」環境、に決まっていると。でも、本当にそう断言していいのだろうか。それほど簡単ではないような気がする。

話は変わるが、昆虫を含む動植物等の生き物が、自らのからだの色や形などを、周囲の物や動植物などに似せることがある。これを「擬態」という。特に、体の色を背景そっくりに変化させることは「体色変化」と呼ばれる。

「擬態」は、つまり「カモフラージュ」のことだが、生き物の「擬態」は、その生き物にとって必要不可欠な生きる術であり、よって「擬態」の目的自体もその生き物によって異なる。

例えば、背景に似せて自分の姿を隠して身を守る。なるべく目立たないようにして、自分を攻撃して獲物にしようとする相手を欺く。逆に、獲物を得るために攻撃する手段として相手をだます。その擬態の型は様々だ。

話を元に戻そう。だから、Aのように学校でおとなしくしているのは、もしかしたら、なるべく目立たない存在でいた方が、自分にとって都合がいいという、その子なりの深慮があるのかもしれない。でも、自分はそれがベストだと思って学校生活を送ってはいるものの、実は知らず知らずにストレスやフラストレーションをかなり抱えていて、家庭でいろんな話をして一気に吐き出す。なんてことも無きにしもあらずだ。

Bのように、学校で饒舌なのは、特に明るく社交的な性格がそうさせているからではなく、もしかしたら、そういう態度を取り続けないと、人間関係を維持できない状況なのかもしれない。それで、家に帰ると疲れが一気にどつとでる。あるいは、親からいろいろ小言を言われるのがうっとうしくて、あえて家庭での会話を避けている場合だって考えられる。

などなど、個々の事情や様々な理由によって、家庭と学校の姿が大きく異なる場合があるのではないだろうか。昆虫や動植物と同じ生き物として、子どもは子どもなりに、生きていく上での自己防衛や安全な場所を求める本能が働いているのだと思う。

さて、来る保護者面談で、家庭や学校で子どもの姿に大きな違いがあったとしたら、その背景は何なのか、その理由に特別な何かがあるのか、などを話題にしてみてもいいかもしれない。

人間は、いろんな顔をもっている。それは子どもも大人も同じだ。接する相手によって態度や対応を変えたりすることは、人間性の問題として許されることではない。だが、それとは別な話だ。

子どもの行動類型が、環境、特に家庭と学校で大きく異なるのは、その子に対する理解や今後の成長のための大いなるヒントになるはずである。

コロナ禍の今だからこそ、子どもに関わるすべての人間の信頼関係構築が重要であり、その基本は、目と目、心と心で結ぶコミュニケーションだ。

たかだか10～15分程度の面談ではあるが、子どもの「擬態」の真の意味を話題に、子どもの心を紐解く機会になることもあればと期待したい。

蝶の一種のコノハチョウは、脱皮し羽化して成虫になって、木の葉に「擬態」することでこの名が付けられている。

「擬態」自体は決して悪いことではない。「生きる力」にとって必要な本能、自然界に生きとし生けるものとしての知恵そのものだ。